

釣山古墳群発掘調査概報

— 釣山22・23・24号墳の調査 —



1991

鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

序 文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、鳥取市遺跡調査団では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の指導を得ながら埋蔵文化財調査事業を進めているところです。

さて、今回調査を実施しました釣山古墳群の発掘調査事業も、古墳3基の他各種の遺構を検出し、ここに無事所期の目的をはたし報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

最後になりましたが、文化財保護に対する深いご理解とご協力を頂いた日本海信販株式会社、地元菟藩地区の皆様にご心から感謝申し上げます。次第です。

平成3年2月

鳥取市遺跡調査団
団長 田 中 哲 夫

目 次

はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の経過	1
位置と環境	2
発掘調査の概要	4
1. 釣山古墳群	4
2. 調査概要	4
3. 釣山22号墳	6
4. 釣山23号墳	8
5. 釣山24号墳	10
6. その他の遺構	13
おわりに	16

例 言

1. 本書は、鳥取市教育委員会の指導・監督のもと、鳥取市遺跡調査団が実施した、釣山^{つりやま}22、23、24号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した古墳は、鳥取市^{しやう}高^{たか}藩^{はん}字^{あざ}龍^{りゆう}山^{さん}701番地に所在する。
3. 本書に用いた方位は、遺跡分布図、釣山古墳群分布図を除き磁北を示し、レベルは海拔標高である。
4. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 本書の執筆・編集は、調査参加者をはじめ多くの方々の指導と支援を得て山田真宏、平川誠があたった。

はじめに

1. 調査に至る経過

今回発掘調査を実施した釣山22～24号墳は、鳥取市菟蒲に所在します。発掘調査のきっかけは、日本海信販株式会社の計画するスポーツ・レジャー関連施設建設事業によるものです。

平成元年春に、菟蒲地区の西側に位置する山林約8ヘクタールを造成してスポーツ・レジャー関連施設を建設したい旨事業者及び地元菟蒲地区から連絡がありました。相談を受けた鳥取市教育委員会では、さっそく現地を確認するとともに分布調査を行ないました。現地は、釣山と呼ばれる独立丘陵の東斜面で、南北の主稜線から数本の小尾根が延びる起伏に富んだ丘陵地です。分布調査の結果、以前から釣山古墳群として遺跡地図に記されている主稜線の古墳のほか、事業計画地内の南北に位置する小尾根から新しく古墳が確認されました。この分布調査の結果をもとに、これらの古墳の取り扱いについて事業者と協議し、造成計画の検討をお願いすることになりました。しかし、造成工事の境界付近の古墳はともかくとして、計画地の中央部に所在する5基の古墳は発掘調査が避けられないものでした。このため造成工事で消滅する恐れのある古墳については発掘調査を行なうことになりました。しかし、鳥取市教育委員会ですでに平成2年度の発掘計画が決まっており、5基の古墳すべてを早期に発掘調査することは困難でした。このため造成工事の工程に合わせて平成2年春（南小尾根の2基）と平成3年春以降（北小尾根の3基）の2時期に分けて発掘調査することになりました。こうして平成2年2月には調査実施のための協議も整い、同年3月から発掘調査の運びとなりました。

2. 発掘調査の経過

今回の発掘調査は平成2年3月から開始しました。資材などの準備、搬入ののち、立ち木の伐採、調査杭の設定、水準点の移動を行ない作業に取りかかりました。

調査対象地である事業計画地南側の小尾根上の正確な古墳の数と規模の確認、そして表土除去範囲の設定のためにトレンチ掘りから取りかかりました。このトレンチ調査によって古墳は当初

の2基から3基に増加することになりました。さて、確認した3基の古墳(22、23、24号墳)は順次表土除去を行ない、その後各古墳の主体部およびその他の遺構の検出、掘り下げを行ないました。同時に各調査工程ごとの実測、写真撮影等を行ない記録を作成しました。6月上旬には資材等の撤去を行なって現地での調査を終了しました。

なお、5月下旬に現地説明会を行ない、約100名の参加を得ることができました。



発掘調査説明会風景

位置と環境

釣山古墳群の所在する釣山（高蒲山）は、J R鳥取駅の南西方向約2.6kmの地点に位置する独立丘陵です。中国山地から千代川によって形成された沖積平野に向かって延びる尾根の先端部に位置し、標高約105mを測ります。丘陵の南側には千代川の支流である有富川が流れ、他の三方は水田に囲まれています。この丘陵は、高蒲、本高、服部の各地区にまたがっており、比較的傾斜の緩やかな東側の高蒲地区では植林などに利用されていますが、積極的な開発は行なわれていません。周辺一帯の水田や山裾の座光寺の静かなたたずまいとあいまって、のどかな田園風景が見られました。しかしながら近年の減反政策による転作、1985年（昭和60）の鳥取国体開催、それと前後する鳥取南バイパスの開通や工業団地の造成にともなうにわかに脚光を浴び、開発の



釣山古墳群周辺主要遺跡分布図

波にさらされることとなりました。

古墳群の所在する千代川左岸には、全国的にも著名な原始・古代遺跡の存在が知られています。縄文時代の遺跡としては、古くから知られていた青島遺跡、櫛や舟状木製品等の出土した桂見遺跡、櫛やカゴ、柄杓等の出土した布勢グラウンド遺跡などの低湿地性遺跡のほか、古海遺跡等が知られています。

弥生時代の遺跡としては、縄文時代から引き続き営まれた青島遺跡や古海遺跡のほか、各種多彩な遺物や水路、水田跡などが発見された岩古遺跡、木製品の出土した服部遺跡、山ヶ鼻遺跡、葛蒲遺跡、北村恵儀谷遺跡などの集落遺跡があります。また、弥生時代の墳墓遺跡としては、四隅突出型方形墓が検出された桂見墳墓群が知られています。

古墳時代に入ると、泉東部で最大級の前方後円墳をはじめとした大小様々な古墳が丘陵上に営まれるようになります。そのうちの大部分は今回の調査古墳のような小規模な円墳や方墳ですが、大型の古墳として枋間1号墳、布勢1号墳、古海36号墳などの前方後円（方）墳があります。また横穴式石室を持つ後期古墳があまり知られていない鳥取平野西部の中にあつて、大きな岩をくり抜いて造った石室を持つ山ヶ鼻古墳や北村の古墳群は貴重な存在となっています。

この地域は律令体制下の因幡高草郡にあたり、一帯に桑里制が施行され、後に東大寺領高庭荘として開発が進められていたことが奈良東大寺の古文書から知ることができます。この時期の遺跡としてまず葛蒲廃寺をあげることができます。現在でも塔の心柱を支えた大きな礎石が葛蒲地区西側の水田に残っています。郡家町の土師百井廃寺と同系の瓦が出土していて、白鳳時代にさかのぼる寺院跡と考えられています。このほか奈良、平安時代の遺跡として古海遺跡、北村恵儀谷遺跡があり、式内社の大野見宿禰命神社も近くにあります。また、古代山陰道がこの葛蒲付近を通過していた可能性も極めて高いといえます。

以上のようにこの地域は古くから政治、経済、文化などの要として位置してきたことをうかがい知ることができます。



葛蒲廃寺の礎石



山ヶ鼻古墳の石室

発掘調査の概要

1. 釣山古墳群

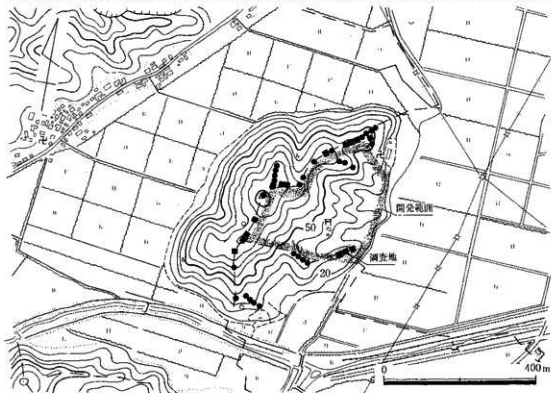
釣山古墳群は釣山の主稜線および支稜線上に造営された約10m～20m程度の小規模な円墳と方墳を主体とした古墳群です。『改訂鳥取県遺跡地図—第1分冊—』（鳥取県教育委員会、1973年）には21基の古墳が記載されていますが、その後の踏査によって現在の古墳の総数は42基に増えています。しかし、これまで出土遺物も知られておらず各古墳の時期や埋葬施設など詳細は不明のままとなっていました。

2. 調査の概要

今回の発掘調査は、釣山古墳群のうち22、23、24号墳を対象として実施しました。3基の古墳は、釣山頂上から東に延びた標高30m前後のゆるやかな支稜線上に隣接して築造されており、ほぼ同時期のものと考えられます。各古墳とも形状は方形となっています。

各古墳から2～7基の複数の埋葬施設が検出されるとともに、弥生時代、中世、近世以降の遺構も検出されました。

出土遺物の量は極めて少なく、後で述べる各古墳出土の遺物以外には、古墳時代前期の円蓋を押捺した壺口縁片1点、磨製石斧2点、打製石斧2点が表土除去中に出土したに留まっています。

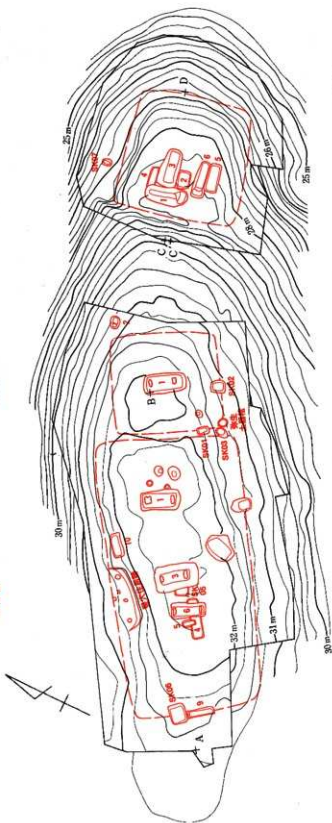


釣山古墳群分布図

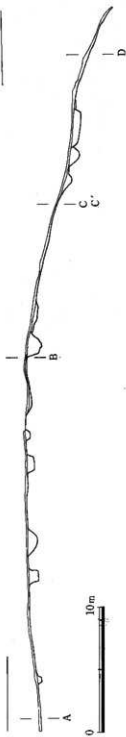
22号墳

23号墳

24号墳



L = 34.00 m



調査地遺構配置図



調査地全景（左から22、23、24号墳）

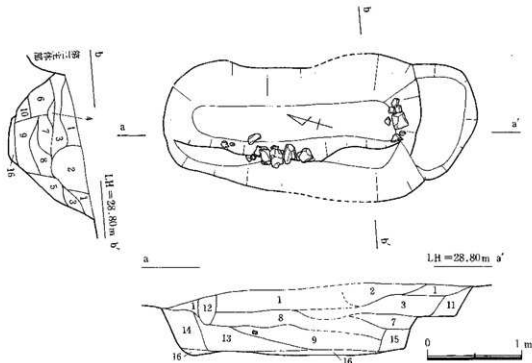
3. 釣山22号墳

22号墳は、調査古墳の存在する尾根の最も東側先端部に位置し、標高27～29m付近に構築されています。調査前には尾根の傾斜地に若下の傾斜の変換は認められましたが、明確に古墳の存在を確信し難かったためトレンチを設定して古墳に伴う溝等を確認しました。

本墳の形状は方形で、墳丘は尾根を一直線状に横断する掘り割り状の溝を掘り込むとともに、地山の切削加工、盛土を行なって造成しています。規模は東西11.5m、南北9.5m、西側のみに存在する溝底からの比高は約0.3mで、北側墳裾からの最大高1.5mを測ります。埋葬施設は全部で6基検出しました。第1主体部は長軸を南北方向にとって、墳頂部の西端に掘り込まれています。また他の5基は第1主体部に隣接、あるいは一部切りあって長軸を東西方向にとって掘り込まれています。いずれも木棺直葬と考えられますが、第1主体部では小口部および西側側板部の裏込めに墓壇を掘る際にだと思われる地山の礫が使用されており、第4主体部では両小口部に小口板として使用した可能性もある割り石が検出されています。また、第1主体部墓壇の南側および第6主体部墓壇の西側小口部は二段に掘り込まれています。

遺物は極めて少なく、西側溝底から詳細不明の鉄製品と、第1、第2、第3主体部埋土内中位から土師器細片がわずかに出土するに留まっています。

本古墳は、墳形、主体部の形態、22、23号墳との関係等から古墳時代前期後半を前後する時期に築造されたものと考えられます。



1. 暗褐色シルト (2-4 cm 大の地山礫を含む) 2. 黒褐色シルト (0.5-10 cm 大の地山礫を含む) 3. 褐色シルト (1-3 cm 大の地山礫を含む) 4. 褐色シルト (3より細かい) 5. 明褐色シルト (0.5-5 cm 大の地山礫および地山ブロックを密に含む、よくしまっている) 6. 明褐色シルト (1 cm 大の地山ブロックを密に含む) 7. 褐色シルト (0.5-1 cm 大の地山ブロックを含む、3より細かい) 8. 褐色シルト (1-4 cm 大の地山礫および地山ブロックを含む、3より細かい、7よりやや明るい) 9. 褐色シルト (7よりやや細かい、4よりやや明るい) 10. 明褐色シルト (0.5-1 cm 大の地山ブロックを含む、6よりやや細かい) 11. 褐色シルト (0.5-1 cm 大の地山ブロックをわずかに含む、3よりやや細かい) 12. 暗褐色シルト (1-4 cm 大の地山礫および地山ブロックを含む) 13. 暗褐色シルト 14. 暗褐色シルト (1-4 cm 大の地山ブロックを多く含む) 15. 褐色シルト (9よりやや細かい) 16. 褐色シルト (1-5 cm 大の地山ブロックを多く含む)

22号墳第1主体部平面・断面実測図



22号墳全景 (西から)

4. 釣山23号墳

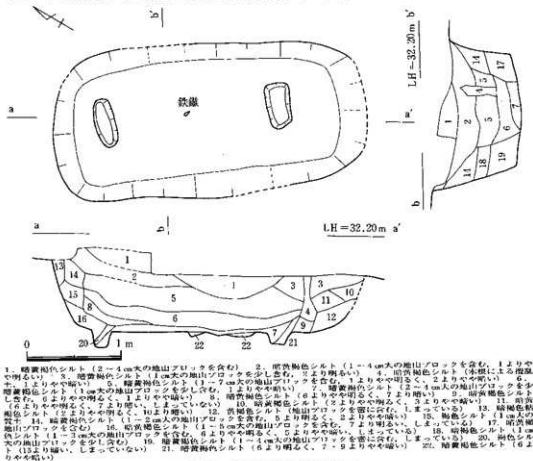
23号墳は、22号墳の西側約10mに位置し、標高31m付近に構築されています。形状は22号墳と同様の方形で、墳丘はかなり流失していますが、隣接する24号墳との間に尾根を一直線状に横断する浅い掘り割り状の溝を掘り込むとともに、地山の切削加工、若干の盛土を行なうことによつて整形しています。規模は東西6.5m、南北7.5m、東側墳頂からの最大高0.9mを測ります。

埋葬施設は全部で2基検出しました。墳頂部のやや南東寄りで検出された第1主体部は長軸を南北方向にとつた木棺直葬で、両小口部には小口板を立てるための穴が掘り込まれています。この想定木棺の床面中央付近から北西側に刃先を向ける形で鉄鎌1点が出土しました。

墳丘の北東側約1mの墳頂に位置する第2主体部は、大小2個の甕を利用した土器棺です。大きな甕の口縁部に小さな甕の胴部をピッタリ合わせて蓋にしています。

本墳築造の時期は、出土遺物の編年観、墳丘、主体部の状況、24号墳との関係等から22号墳と同様の古墳時代前期後半と考えられます。

なお、本墳墳頂部からは後述の集石遺構が検出されています。



23号墳第1主体部平面・断面実測図



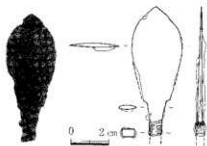
23号墳全景（西から）



23号墳土器棺（第2主体部）



23号墳第1主体部



23号墳第1主体部出土鉄鍔

5. 釣山24号墳

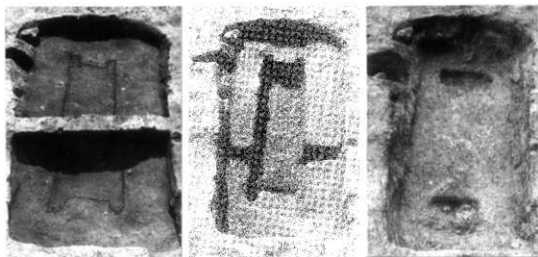
24号墳は、23号墳の西側に隣接し、標高約32mの尾根の平坦部を利用して構築されています。

本墳の形状は長方形で、墳丘はかなり流失していますが、地山の切削加工と若干の盛土によって整形されたものと考えられます。規模は東西22m、南北約10m、南側墳裾からの最大高0.8mを測ります。

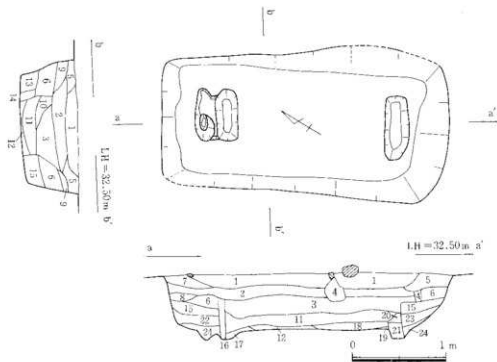
埋葬施設は全部で7基検出しました。第1・第3・第5・第6・第9主体部は長軸を南北にとって掘り込まれ、第4・第10主体部は長軸を東西にとって掘り込まれています（第2、第7、第8主体部は欠番）。このうち第1主体部は墳頂部東端から約4m西側、第3主体部は墳頂部中央、第6主体部は第3主体部の約1m西、第5主体部は第6主体部の西隣り、第9主体部は西側墳裾部にそれぞれ位置しています。また、第4主体部は第5、第6主体部を切る形でほぼ直交して掘り込まれ、第10主体部は北側墳丘斜面上に位置しています。第5主体部の埋葬方法は明確にはできませんでしたが、そのほかのものはいずれも木棺直葬と考えられます。このうち第1、第3、



24号墳全景（航空写真）



24号墳第1主体部調査状況 (左から木棺痕跡の検出、木棺痕跡、墓竅)



1. 褐色シルト (1-3cm大の地山礫を多く含む) 2. 暗褐色シルト (5cm大の礫を含む) 3. 褐色シルト (0.5-2cm大の礫を含む。よりやや細かい) 4. 暗褐色シルト (2より細かい。本館による風化) 5. 暗褐色砂質土 (0.5-2cm大の礫を密に含む。しまっている) 6. 暗褐色シルト (1-2cm大の礫を密に含む。よくしまっている) 7. 褐色砂質土 (1-5cm大の礫を若干含む) 8. 暗褐色シルト (2-7cm大の礫を密に含む。しまっている) 9. 暗褐色粘質土 (1-3cm大の礫を若干含む。よりやや細かい) 10. 暗褐色シルト (0.5-5cm大の礫を若干含む) 11. 褐色シルト (0.5-3cm大の礫を若干含む。よりやや細かい) 12. 暗褐色シルト (0.5-2cm大の礫を含む。よりやや粗い) 13. 暗褐色シルト (1cm大の礫を含む。より粗い。あまりしまっていない) 14. 暗褐色シルト (1-3cm大の礫を含む。あとは13とはほぼ同じ) 15. 暗褐色シルト (1-5cm大の礫を密に含む。より細かい。よくしまっている) 16. 暗褐色シルト (8よりやや粗い。あまりしまっていない) 17. 暗褐色シルト (10よりやや粗い) 18. 褐色シルト (1cm大の礫を含む。よりやや粗い) 19. 17と同じ 20. 17と同じ 21. 暗褐色シルト (0.5-2cm大の礫を含む) 22. 暗褐色シルト (0.5-3cm大の礫を密に含む。しまっている) 23. 暗褐色シルト (0.5-2cm大の礫を密に含む。よりやや粗い)

24号墳第1主体部平面・断面実測図

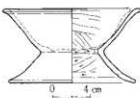
第6主体部には両小口部に小口板を立てるための穴が掘り込まれていて、第1主体部の北側小口部には棺を据え付ける際にそのサイズにあわせて穴を掘り変えた後が残っています。また、第9主体部の北側小口部にも小口板を立てるための穴が掘り込まれ、第6主体部では小口穴の他に墓壇壁部に側板を立てるための溝が掘られています。

遺物は、第4主体部と第9主体部から出土しました。第4主体部の遺物は、主体部東側から一部を打ち欠いた受け部を上にした鼓形器台1点と、西側から長さ約27cmで刃部が若干曲がった鉄剣1点が出土しました。また、第9主体部からは北側小口部付近から推定長21cm強でU字形に屈曲した鍔1点が出土しました。

本墳築造の時期は、22、23号墳と同様の古墳時代前期後半と考えられ、23号墳に先行して構築されたものと考えられます。



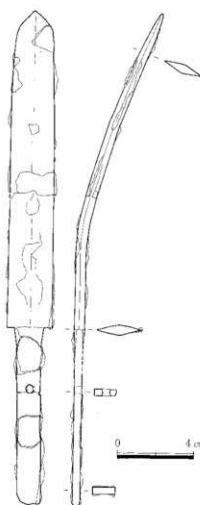
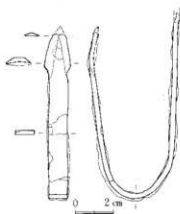
24号墳第4主体部



24号墳第4主体部出土器台



24号墳第9主体部出土鍔



24号墳第4主体部出土鉄剣

6. その他の遺構

1) 土器棺墓

24号墳の南東部から検出された弥生時代後期の甕2個を組み合わせたものです。高さ40.2cm、最大径28.3cmの甕の口縁部に、半分に縦割りした甕（遺存高26.3cm）の体部から底部をかぶせて蓋にしています。

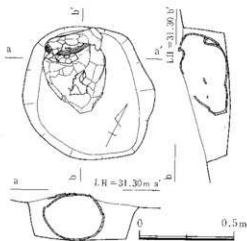
2) 竪穴住居跡

24号墳の北側斜面から検出されたもので、古墳築造前の遺構です。かなりの部分が流失していますが、遺存長は東西で約5mを測ります。その北側には直径20cm強、深さ約30cmのピット3つがほぼ等間隔で掘り込まれており、3本以上の柱を持つ竪穴住居跡と考えられます。明確にこの遺構に伴う遺物が出土していないためはっきりした時期は不明ですが、古墳との切りあい関係などから弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられます。

3) 集石遺構

今回の調査地内からは集石遺構が2基検出されました。

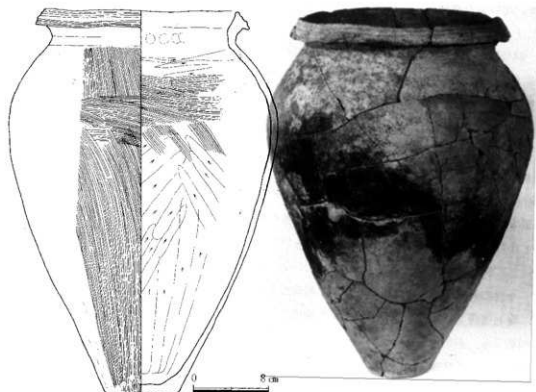
集石遺構1は、23号墳の墳頂部から検出されました。地山の礫や割り石、河原石を使用して東西約3m、南北約2mの長方形の区画を形成するもので、その東側では石が数段積み重なり中から器表に叩き目を持つ中世の須恵器系甕の破片が多数出土しました。また、この長方形区画の中



弥生土器棺墓平面・断面実測図



弥生土器棺墓検出状況



棺に使用された弥生土器

からは中国の北宋銭6枚も出土しました。

これらのことからこの遺構は平安時代末から室町時代初期の頃の埋葬施設であった可能性が高いと考えられます。

集石遺構2は、24号墳の南側から検出されました。長さ0.7m、幅0.65m、深さ0.25mの土壇上に地山の礫や割り石が積み重なって検出され、その中から長さ5cm強の角釘が4個体以上出土しています。これらのことから、この遺構も集石遺構1と同様に中世の埋葬施設であった可能性が考えられます。

4) 土坑

今田の調査地内からは7基の土坑が検出されました。

土坑1は、24号墳の南東側、土坑2は23号墳の南側、土坑3は弥生土器棺の西隣、土坑4は24号墳南側墳頂部、土坑5は24号墳第3主体部の西側と一部切りあって、土坑6は24号墳第9主体部の北隣、土坑7は22号墳の北側テラス部にそれぞれ位置しています。このうち土坑3からは詳細不明の鉄製品が出土し、土坑4からは多数の角礫が積み重なって検出されました。また、土坑6からは近世の五輪塔2組が出土しました。

土坑6以外からは遺物がほとんど出土していないためはっきりした時期は不明ですが、中世か

ら近世にかけて掘り込まれたものと考えられます。また、上坑6については近世以降に掘り込まれ、その中に五輪塔が埋納されたものと考えられます。

5) 柱 穴

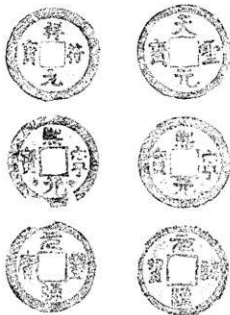
今回の調査地内からは5基の柱穴が検出されました。柱穴1、3、4、5は24号墳東側墳頂部から裏込めの石を伴って検出されました。また柱穴2は23号墳の南西側から検出されました。いずれも土器などの遺物が出土していないためはっきりした時期は不明ですが、おそらく上坑と同様の中世から近世にかけてのものと考えられます。



集石遺構1



集石遺構2



集石遺構1出土銅銭拓影



土坑6 (五輪塔出土)

おわりに

今回の発掘調査は、独立丘陵である釣山から東側へ延びる小支線状に立地する釣山22号墳、23号墳、24号墳の3基の古墳が対象となりました。調査の過程でこれらの古墳以外の遺構も検出され、同時に調査を行いました。以下、いくつかのポイントごとに簡単にまとめ今回の発掘調査のまとめとします。

古墳の位置 3基の古墳は、釣山古墳群を構成する他の古墳とは少し離れた小尾根の先端部に立地し、まとめて築造されています。標高31m～32m付近に23号墳、24号墳が隣接して存在し、直線で約10m離れた標高27m～29m付近に22号墳が位置しています。

墳丘 墳丘が完全に遺存しているものはありませんでしたが、掘り割り状の溝や地山加工段等から推定される規模は、22号墳が一辺10m前後、23号墳が一辺7m前後であるのに対し、24号墳は22m×10mとなっており、他の古墳と比べて墳丘規模の上では格差が認められます。本来の墳丘高は不明ですが、遺存高から推定してあと数十cmないし1m程度の盛土はなされていたものと考えられます。墳丘構造は地山加工と盛土によって成されており、尾根の高位側あるいは隣接古墳との境界に尾根を一直線状に横断する掘り割り状の溝が掘り込まれています。

埋葬施設 埋葬施設は、22号墳から6基の木棺、23号墳から1基の木棺と1基の土器棺、24号墳から6基の木棺と1基の詳細不明の土器を検出しました。いずれの古墳も複数埋葬となっている点が特徴的です。各埋葬施設の主軸には南北方向と東西方向の2方向があり、各古墳とも他と異なる1基ずつを除くと統一性が見受けられます。22号墳では東西方向を、23号墳、24号墳では南北方向に統一性が見られます。これは埋葬施設造営の若干の時期差、あるいは墳丘造営の際の地形の制約等によるものではなかろうかと考えられます。

なお墓塚形態等から考えられる埋葬順位は、主軸が他の埋葬施設と異なるものを除くと、22号墳では西向き、23号墳、24号墳では北向きにはほぼ統一してあるようです。

築造時期 3基の古墳とも出土遺物が少なく築造時期を推定する資料に乏しいといえますが、23号墳、24号墳埋葬施設内の遺物はいずれも古墳時代前期後半的な様相を呈しており、ほぼこの時期に築造されたものと考えられます。また22号墳についても、墳形や埋葬施設の形態等からやはり同時期の築造と考えられます。3基の古墳相互の関係性については今後の課題ですが、今回発掘調査を行なった小群の中では24号墳が中心的な位置を占めていることはいえましよう。

その他の遺構 今回の発掘調査地内からは前述のとおり、弥生時代後期、古墳時代前期、中世、中近世以降のものと思われる各遺構が検出されました。

今回発掘調査を実施した古墳やその他の遺構は、この菖蒲周辺で遅くとも弥生時代後期頃から人々の営みが続けられてきたことを実証するものといえます。このことは調査地周辺の各遺跡の状況からもいえることでしょう。

釣山古墳群調査古墳一覽表

名 称	墳丘 形状・規模 m	埋 葬 方 法			墓 蓋		埋 葬 高 度		損 亡・崩 落	備 考
		主体部 地	埋葬方法	木 箱 長さ×幅m	平面形	蓋 長さ×幅×深さm	土師器細片	損 亡・崩 落		
釣山22号墳	方形墳 東西 約11.5	1	木棺直葬	- × 0.5	隅丸方形	3.25×1.60×0.75	土師器細片		墳頂の西側小口窓が二段、木棺裏込めに石材使用	
		2	木棺直葬	- × -	隅丸方形	1.40×1.00×0.40	土師器細片			
	墳北 9.5 最大高 1.5	3	木棺直葬	- × -	隅丸方形	3.00×1.65×0.65	土師器細片	墳丘中央部に位置する 西小口裏込め(?)に石材使用		
		4	木棺直葬	- × -	隅丸方形	1.75×0.60×0.20				
		5	木棺直葬	- × -	隅丸方形	2.30×1.00×0.60				
		6	木棺直葬	- × -	隅丸方形	2.95×0.95×0.50				
釣山23号墳	方形墳 東西 6.5 南北 7.5 最大高 0.9	1	木棺直葬	2.50×0.52	隅丸方形	約 3.30×1.65×0.30	鉄鍬 1	打製石斧 2 (表上中)	小口穴あり	
		2	土 器 棺 (蓋)	-	隅丸方形	0.95×0.75×0.50		磨製石斧 1 (表上中)		
釣山24号墳	方形墳 東西 22	1	木棺直葬	2.15×0.60	隅丸方形	3.00×1.50×0.60			小口穴あり、木棺直葬	
		3	木棺直葬	2.20×0.35	隅丸方形	3.40×2.00×0.75				
	墳北 約10 最大高 0.8	4	木棺直葬	- × 0.40	隅丸方形	3.15×0.90×0.20	鉄型跡台1、鉄劍1	磨製石斧 1 (表上中)	鉄型器石は土師器転用材	
		5	(土溝)?	-	隅丸方形	1.00×0.50×0.25				
		6	木棺直葬	2.20×0.75	隅丸方形	2.60×1.20×0.80				
		9	木棺直葬	- × -	隅丸方形	2.10×0.50×0.25				
		10	木棺直葬	- × -	隅丸方形	1.85×0.80×0.95	鍬 1			

約山古墳群調査遺構一覽表

名称	形状	規模 (m)	遺物	備	考
赤生土器棺(甕)	—	0.70×0.65×0.25 (築城)	甕2 (棺身1、棺蓋1) 土器片1		甕を蓋割りして蓋とする、24号墳の南東側に位置
竪穴住居跡	—	東西 約5			24号墳築造前遺構、24号墳の北西側に位置
築石遺構 1	長方形区画	東西約3、南北約2	須賀瓦上器、北宋銭		中世の埋葬施設？、23号墳頂部に位置
築石遺構 2	隅丸方形？	1.55×1.00×0.40 (遺構)	鉄釘		中世の埋葬施設？、24号墳の南側に位置
土坑 1	隅丸方形	0.95×0.60×0.40			24号墳の南東側に位置
土坑 2	隅丸方形	1.10×1.00×0.55			23号墳の南側に位置
土坑 3	楕円形	1.50×0.65×0.20	鉄釘(?)		中近世上層墓？、24号墳の南側に位置
土坑 4	隅丸方形	2.40×1.45×0.55	角礫		24号墳の墳頂部南東側に位置
土坑 5	隅丸方形	1.05×0.80×0.15			中世七層墓？、24号墳墳頂部に位置、第3下体部と切り合う
土坑 6	隅丸方形	1.55×1.25×0.12	近世五輪塔2組		24号墳の北西側に位置
土坑 7	—	0.70×0.58×0.30			22号墳の北西側テラス部に位置
柱穴 1	—	—			裏込め石、24号墳東側墳頂部に位置、第1主体部と切り合う
柱穴 2	—	—			23号墳南東側斜面に位置
柱穴 3	—	—			裏込め石、24号墳東側墳頂部に位置
柱穴 4	—	—			裏込め石、24号墳東側墳頂部に位置
柱穴 5	—	—			裏込め石、24号墳東側墳頂部に位置

鳥取市文化財報告書 28

釣山古墳群発掘調査概報

平成 3 (1991) 年 2 月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会

鳥取市遺跡調査団

印刷所 株式会社 矢谷印刷所
